

歌合部類

八月十五夜
九月十三夜

九

皇
911.18
Se
0



撰歌合 建仁元年八月十五夜和哥所



題

月多秋友 月新松風 月下拈衣

海色秋月 湖上月明 古寺殘月

深山曉月 明月露深 田家見月

河月似冰

作者

左

女房 後鳥羽院

左大臣正二位藤原良經 後京極坊政



沙弥叔阿

俊成口女

宮内口

越前

丹後

散位正四位下臣若原朝臣良家

沙弥寂蓮

從五位下行右了助臣源朝臣家長

散位坂五位下臣縣主鴨長明

正五位上行左兵衛尉臣若原朝臣秀能

右

内大臣正二位兼行右近衛大将皇太子傅臣源朝臣通親

前位正四位兼左

正二位行權大納言臣若原朝臣忠宣

左位正三位行左左位中右兼左右位若原臣公經

小侍從

源政

散位正四位下臣若原朝臣隆信

正四位下行左左位中右源朝臣通具

正五位下行左近衛權少右兼左右位若原朝臣定家

五位上守左色未控少将に藤原朝臣雅経
從五位下守左色未控少将源朝臣具親
從五位上行集人正位大江朝臣公宗

讀師 右方

講師 左方

判者 釋阿

一番 月多妹友

讀後拾

左孫

右大臣

月あつて雅はあつてむ君代は秋乃こころひのつくらりとも

右

儲成

こころひより子代の秋を控うそへはつて秋月あんの秋は事ふ

右大臣の秋は事ふ

二番

左孫

沙路寂蓮

新古

多秋乃招とむうふあつてあつて秋の秋は月

右

お控傍正

君代の秋をふかられぬ秋は月あつて秋の秋は事ふ

右大臣の秋は事ふ

三番

左指

女房

けしき乃ちとせの秋はしく免らるゝあれてもねむの月さるは

右

雅徑

いく秋を空よ整つてて君う代よことまんこり乃をぬれ月

左子年の秋いく免らりの月言振神妙く思

こ希古今こる仍考務

四番

左

乃家

君う代の整つて思へはひささ乃月のま古のりよを忘れ秋

右指

肉大に

ゆくを忘れ移ひささこの秋乃月何ういれをたのめあ

左お右方殊を了上旨右寄右方指ひささ乃

月を以て空しうへは未の句とこ一急のあよ

五番

左指

宮内口

り未もいくよの秋乃友あねやをれてもあふ山の月

右

公徑

よきておぬいふいにくらりつぬ秋の月をえんん

判云右寄友の心をこくお母つるくやしく以左

乃指

六番 月お松風

左指

女房

庭に松木のつらりと家月影よみつくのあき風そよ

右 月多秋友 控大御所

そよわくそよわく 月よ多秋友とさしそよ乃山のあ代乃秋

右 乃下向け乃侍一哥なりと左方より判者以

左 乃侍

七番 月あき風

左 抄 左大臣

妹の夜乃ひらりもそよもひらりも月乃うらら松風そよ

右 月多秋友 隆信御所

そよあして誰うきくむ秋の月とまふそよむ(さ家代乃就

左 乃一哥姿をうく右に祝の心ありとくお侍

八番 月あき風

左 侍

新後

月影を忘さつ乃浦の松風よむそよれそよら流る

右 内大臣

あけやこの月をみとり乃書くえは秋あ風のあよもむ

判者以右乃侍但左の二哥こくに宣旨也一侍の中

左 乃侍

九番

左 侍 文内

月とあはれそよんそよらあけの松とあきそよら松風

右 通具

あきうあき洞といふ時あきん月あきそよたらそよの松風

右 月よこそあきそよ乃書風そよられとそよ

左 侍とあきむ秋風そよら

左 後

後成口女

月よさふあこねをつらねの衣乃ち後のことねきれ風丸

右

具歌

くるとつたなく山のそまてしそらあ月よりあ乃ち子の松風
右はあ月よりあ海のいけあろあまうさやあう上よ左
心あさあまのうあつてふらうーくねれそこあ後
くゆ判者やう

十一番

左 後

寂蓮

月程ゆるめあめつちも任吉の松とけいしてあさうせそ吹

右

保季

はろく空流より松あうほりさて月まうさうさう乃浦風
うさこのうう風任うー乃松よ及ううーとてあたあ後

十二番

左 後

鴨長明

^{新古}あそめれいちふ物あ月よ又さう身ひとら乃そねのま風

右

小侍

すえらうの月いさう乃浦あみお松あ風と神さひよそり
あ風乃神さひよさうんさうてはにうさあては
うへよあ身ひとら此あ子のあ風免つーととく
以左乃後

十三番 月下接衣

左 後

宮内

まろあきてるあふこそそ乃をさこかれ麻のさ衣月ようつ夢
右 月あ松風
新侍
秋八月月まもあまは松の風いふあうあていうああれそん

右の松の風も優よ八侍れとあふふそそのすさひ
るしとけけあさこのさ衣月ふうつあまにけしと
やゆとて以たあ侍

十四番 月下掛衣

左侍

女房

あさち乃月吹風よ秋よきてぬきと人ハ衣うつあり

右

定家

婦風よ夜ききの衣うちひめあきゆく月乃をき北山本

右侍あふいくやふ上よたのあしにけりけ

右侍

十五番

左侍

右大侍

^{新古}里あれく月やあふぬと恨てと誰あさちあふ衣うつん

右

通具

さうあきてさうていさきとあしあし月影よ衣うつん

左侍あしにけりけ

十六番 海を越秋月

左侍

後成は女

浪のよふ千里乃あふや澄て月影かふ秋のけりか

右月下掛衣

澄波

すうやあふんのこと乃秋のふ八月ふあさあて衣うつ也

又以たあ侍

十七番 海を越秋月

左侍

誠あ

^{新續古}紀の玉や秋さふあさあさう風あさこの月乃きぬらふ

右月下掛衣

公景

松竹やどしころ延喜をいあし八月よやこころい神めくころん
左番 跡小うろし仍左番

カニ番

左

あふ秀能

あふ乃やくとふの相家くころししとくはかろるる月

右番

内大臣

延喜人七月よのあれいそ名ころし秋を招くころしは
左月のおお落たりそころし秋乃さほとらに右
の侍くゆり之

サニ番 湖上月の

左番

丹後

^{新古}おもとく浦く海に流るる月を跡の志賀のくり強
右

内大臣

おもとくひら乃山風海を八月もてく浦のさ流
海をさく古侍あさ海は流れと免つころしあ
あふれを控ひ左番

カニ番

左番

女房

かきとや竹の湖乃水のおとふころ月あふん秋のせそ吹

右

澄波

あふ乃湖のあのおもをころし月あみよとちあらふ
この外とく以左番

サニ番

左

新阿

よ白くや月乃水は志浦は控くあこの扱はつしきり

右指

お控傍正

あつれ浦よこさそや月乃やうらん星うぬ祚の法とびて
たの事家事控巖うとく祚威依く為務

サ六番 古寺跡月

左指

歌阿

^{玉葉}又まらひ嵐乃やうのふととら松の庵(のう) 五明乃月

右 湖上月明

歌あ

^{新續古}かゝるや秋のこらひとありむきハてり月あふ浦風を吹

右のてり月あふあ乃たのまふハ今下におとりて空
ゆとしてあ指

サ七番 古寺跡月

左指

秀能

まつせ山あうらさそそて出つ月やうく木れるハ五明乃空

右 湖上月明

家長

月清こ流のこそあう流をともゆく急あくま記志聖の浦風
左あ又宣仍く為務

サ八番

左 古寺跡月

文内口

秋こあ紙おがつうあやまつせ山あめこねもふ跡る夜の月
右

乙経

秋さめとふ流のまそあか記志をまつせやまのあつ明乃月
左あれこれとと跡あつては行り右又あつて

たつろあうれハ准てこ指

サ九番

左指

鴨長明

まつせやう流のひくさふおろろ老ハとこけり月の入るれ空

右

具歌

あれやけ跡さるん乃 影あしむき影のやうにみぬ乃月
左 影のひび入るのを影さるん乃月
いづれもや陳尸云遊子に跡月行るを
多 曉月也 曉跡月さるん乃月
さういふとさういふ跡中判者やう

二十番 深山曉月

左

女房

新續言

位あれく 誰影やうなるむしん 吉野乃おくのまぬの月

右 後

お控係正

うー 聖山月ハさるん乃月
左 深山乃んぬあしむき乃月ハ家とさるん乃月
らんやさるん乃月ハ家とさるん乃月

廿一番

左 後

左 女房

新百

深々 ぬか山乃 影の移さるん乃月ハ家とさるん乃月

右

雅徑

人いあて 影の移さるん乃月ハ家とさるん乃月
左 右 誰影事さるん乃月ハ家とさるん乃月

三十二番

左 後

文内口

ゆえても 影やうぬ影乃月ハ家とさるん乃月
右 控大納言

うー 影やうぬ影乃月ハ家とさるん乃月
右 影たさるん乃月ハ家とさるん乃月
三十三番

左指

後成口女

秋乃夜のふささねをともりり吉登の月乃明このを
右 内大臣

あつれありきききせぬ山あれを明きしきくわ秋のふれ月
又ししね事ありしうわ物中定し

三十四番

左指

実家

つとどのそ行しえあれさみしし登の松よあつれきめ乃月
右 野月露涼 内大臣

あらあよあきねをさうつるの系かた乃月夜も秋後をさふ
右 寄出玄の事よハ思ひうりてわれとたうりく
うろしきあありしきくわ指

五番 涼山曉月

新古

左指

鴨也的

ふもさうし独るやうし入松の葉よ暑うもさうさ明乃月
右 登月露涼 実家

おさあはね登へのろくわ乃神の露とのすえんそ月のさか
たあひとりやうの松の葉よさうしきくわ指
うろしきあありしきくわ指

三十六番

左指

女房

月正あを露と露しきあ城登乃小霧うさうハ松秋の風
右 具親

これとさふやうりうさう秋風の登る乃露よさうの月
右 登りうわさハ去露候乃身合の中よ翔上
吾乃あよ侍やうよおほゆさう登の秋風い

新編古

左指

女房

右ちりここ山田りる床のいる庭をれあきあれて月とらん人

右

通具

床のひあねよりここ山田りる床のいづれとらんあき月もれ在
やま田りる床のいづれとらんあき物もあきかき
やま田りる床のいづれとらんあき

四十二番

左

秀祿

新編拾

右田りる床の秋風吹そりてりねさひりき山のへ乃月

右指

定家

新後

さきりしれあきと小山田りるあきとらん月影さひりさのへ乃月
右棟本古風とらん山のへ乃月もれとらん定家

四十三番

左指

左大臣

秋のやまきと小山田りるあきとらん月影さひりさのへ乃月

右

具親

いづれとらんあきと小山田りるあきとらん月影さひりさのへ乃月
右あき秋風吹そりてりねさひり山のへ乃月もれとらん定家

四十四番

左指

俊成口女

新古

いづれとらんあきと小山田りるあきとらん月影さひりさのへ乃月

右

お権信正

同

かりのさきと小山田りるあきとらん月影さひりさのへ乃月

右又優もや仍あき

四十五番 河月似水

左翁

左大臣

新拾

あねも又神代はさるるまつこは月の子ありて親とハ

右 田家元月

内大臣

いさむしあかり田乃彦ふ月をわい志を西あへり神代は月ハ

月の水はあはるる家わたりく中より上よいさむしあ
つり田しつゝをききさういことく以左翁翁

四十六番 河月似水

左

新拾

新續古

あきあへ河風さ量こ月こて氷ハ秋乃と此よりきけ

右翁

お権信正

うの河月を若くゆく氷を計りてそわらりこれ
左乃水ハ秋のとつゝおもへる所一仍以左翁翁

四十七番

續後撰

左翁

越前

月影ハこつてみそり一野川志こを流よ秋風そ吹

右

雅經

月々やいふさうゆくと氷るらんはあつこのあそり川風
いとさきり唐からさけて空も仍左翁翁

四十八番

左翁

寂蓮

續新古

月流こつ海をさそる山河乃そつさるこ水の白流

右

通具

月のそむ川せの流ハさむくそそるよ志これ水あふり
又以左翁翁

四十九番

左翁

家長

あゝろふよいさふ流のまつて月歌にかゝる宇治乃川凡

右

保季

岩乃ふハ流ハさ流ふたつて何月ハささのふあゝろふ

右岩乃ふハ流ハささろふあゝろふつきて以左の孫

五十番

左孫

後成の女

大井のわささふふ流のまハさ流して少づ月のうきをれ

右

定家

下見ろく月歌流さあ母津川むとわぬ水とこ不てさる

あわてこ不てさるふろく一仍以左のあ孫也

女房 孫六頁一

内大臣 孫二枚一頁五

右大臣 孫五枚二

意圖 孫三頁四

秋阿 孫二枚一頁二

権大納言 孫一頁一

後成の女 孫三枚三

公經 頁二

宮内口 孫四枚二

小侍 孫一頁一

越前 孫三

源成 頁四

丹後 孫一枚一

陸位 孫一枚一

五家 孫一頁一

定家 孫一頁三

寂蓮 孫三

通具 頁四

家長 孫一

保季 頁三

長明 孫四

雅經 孫三頁三

秀能 孫二頁二

具親 頁五

公宗 頁一

水無瀬殿戀十五首歌合 建仁二年九月十二夜

題

春恋

夏恋

秋恋

冬恋

曉恋

暮恋

霧中恋

山家恋

古心恋

旅泊恋

冥路恋

海色恋

河色恋

寄雨恋

寄風恋

作者

左大臣藤原親定

後鳥羽院

左大臣良經

右大臣正意圖

右大臣能之公繼

後成以女

宮内卿

大倉口散るる家
上総今藤原家隆

大色忠控少将藤原定家
大色忠控少将藤原雅経

讀師

家隆御持

講師

定家御持

判者

皇太后宮大夫入道釋阿

当座付御負追加判詞

一番 左衛門

左衛門

うぐいそ乃水乃洞とけぬれと程と神ハむそ初まつ

右大臣

右

俊成御持

^{新市}面氣乃^{新市}辰ち月そやとりそそやむし一の神乃あまこよ

左衛門のうちにまきいさおりの学共といへる事
をこらし右袂ハ月やあまねまやむし一のつゝあま
ゆ也ともふえんよハんて侍と左衛門家神ハむ
そ初まつといへる事と殊より後くえて侍を
以左衛門

二番

左衛門

親定

月影のやまひ乃山の雲むねと花うこうき^{うこう}は^{うこう}あはれ

左指

お大後心

高もせてあまきういひあふんあ乃こもあまおあろ月夜を

右

控中納言

おしひもや白ひとささか梅えのうつりあを此に身おあゆんと
たあるあほいふいふあんとささかてむ乃控又御月
夜とささかあろをささかいひくおひくおささか
右おしひもやとあくまよ何とせんといふささか
き乃事ささか人とささかされ作りいひあをささか
うらと定り作り也

六番 交意

親定

新續古

左指

お大後心

ささかといふあろ乃あやちあ阿やちとささかぬ神のたささか
右 後成心

續拾遺

ささかやあも程あは夜の夜乃福さあささかのあれささか

福さあささか乃あれささかハといひささか優あささか
あささか乃あれささかハといひささか優あささか
やちとささか乃水といひささかあやちささか
乃者のいひささかハといひささかハといひささかハといひささか

七番

左

お大後心

身おあまきとささかささかハといひささかハといひささかハといひささか

右指

お大後心

身おあまきとささかささかハといひささかハといひささかハといひささか
たハ身にあまきといひささかハといひささかハといひささかハといひささか
ともささかあささかハといひささかハといひささかハといひささかハといひささか
ささかハといひささかハといひささかハといひささかハといひささかハといひささか

八番

左 拵

控中納言

とくく文字つて記をこくハ海さうんさうや作らん
くそふくハ新乃掃く物も存ふむし語をよき言れふとやえむ

右

雅行

さし只人信ふ乃知くさる家とくちつきのおね乃一夢
左おんはにふち作れとまごの行ゆる又作らざる
一夢さしちふさししたとつさハあまりあるやうな
作れとまのりるといふさしハおきてやめし作らふ
やあはくしておとまへし

九番

左 孫

右 大臣

^{新古} 弟ふささ友也知りささくはさよそたての御孫をこけり

右

家隆御孫

時そとやおき乃堂とあるむんさへし人の下はあひと
左あふさくはあふさく謀又あしくさるん作れ
右親とへし人の下乃おひとさささささ
くハ作らさく乃ちしめらとの字あさ難又ハ作ら
福しあ合又ハ多たささうりハ耳又多つ極又作ら
上又あさたの言ふささたて福露そこあしとと
も御へささや作らん

十番

左 拵

右 大臣

あふたふかさささささ友家とまをすれハあさ志のめ
右 定家御孫
おしき記やまつささあさあひてあさや又月乃あやめささ

たふとすれはゆき東をさしとふかりくは
けとちやまははくへふ多しひてあくや五月の
とひく文字つ、記ありしはけりやとてまいの
とのく定りけりく折まきりありし也

十一番 秋意

左

歌定

やさおれぬ宿の庭まきるまきそ秋の夕の坊

右 新古

歌大信正

新古
形へ此歌いさことあてやこわれつ神よりる
たそらうやさいしつらり情をあつきそ秋のゆ風
あろ初うとふたりくはえし情と志そ又つる
あてやといひ神よりる萩の上風いしく
く情と初御負へさうけり六たあし

はえし情れあう右の御つきや情んとう
人あふ跡又しけり也
つくも情り

十二番

左

控申細うし

赤い心あつとさけらぬさふ秋のおもひはう
右 御 定家御記

ころひも月やあぬ大さの秋はあひを人そほれ
あそともふ秋のおもひはほさうあろいあ
九番 秋興賦乃ちあろくも情んあ
ものさしつやをさしあんとさこもさ
程あろあつとやとあし情りい情あありけり也

十三番

意乃んもともくあくや作んともく右のちまふあり作り
—あり

十九番

左 録

お大信正

いつつ又ふきあくなうに河田よびひつひつてもゆくころる死

右

赤澤新伝

意を乃く夏のゆきれさあう雪の流さふやうは山をきみより
たおもひつひつてもゆくころる死
作らに右をりれひ志のうあう雪乃といへうはうりく
作らと未乃う山をきみよりやあう死詞又作れと
あわて度幾をうりくころるや作んともくたら作り也

二十番

左 録

後成口女

新古

通ひう宿乃みち芝くれく又睡る記露乃むま海へ建は

右

定家新伝

床乃露まらうのわささひぬむまひもをぬ人のちきり又
右ああろ婆うりく作んへ一志考も床乃露
物のわあといひて結ひもせぬといふもゆう又ハ作
ましと左程うりく作れを結まうりき

サ一 番 曉意

左 録

家隆新伝

つれ来ふいまいのむはくもひ乃家のあうにきぬ乃月

右

雅經

あういし時乃をひつらむれとあへを君あね夜のあり川さ乃そ
たにいすいのころるはくまひりといふ心さうりくあわ
あうのまひつらむれとあへを君あね夜のあり川さ乃そ

たれあふ心をこゆるふ侍をうさく人のこひや
色はも人御くハ侍しといふおそふらさやうふ
やうふし侍をさるふあふ御く侍むと思ひ
まひとをぬぬ乃をさるふおく月あさやいたと
この侍とを侍をやってけなふ七月ハ侍ああり
と侍侍ハくうとふさう侍りそれとてかち
よあり侍あり

二十五番

左侍

右大臣

もりあはれあ乃をくむいふいとてあむむもあくね神の上か
吹^吹侍^侍と何うス人あある乃をくもといふくさ物と
左あのとくむいふいとてといひきむむもあくねを

侍中納言

いへるあろおくく侍をさる未乃ウヤとくくあ
を侍えくハ侍左侍あり侍る也

二十六番 暮忘

左侍

親定

いふあふあねあまこ乃神の露は月どのこまつゆあくれのを
あふつてまをさくおあむのささた。リそくく君あむのむらん
たああねよあまこ乃神の露は月どのこ侍ヲま
あつてつういふく侍て侍あり侍る

右

定家親

二十七番

左

左大臣

いふいんとあまこ乃その紫と侍とハあてつれれ乃定
右侍

雅定

あちさくそへーのつりこてゆくらんこのおふくれのそい
ぬ市乃又らぬのそあちさくそいともおふろしく
ころりゆりぬれゆとあちさくそいゆりゆらん
このとつりいそりぬれまきりくそいゆれぬの
ゆよありゆりこて

二十八番

左 猪

右 猪

^{新古}何ゆへとどひも入ぬ夕さふゆゆーとどひやうのそ月
右 お大信

いふせんゆへーとどひゆりゆてきゆくゆよ打志おれゆ
左 まちおーものそ山のそ月とゆりゆと右ゆへーと
たよおとひゆりゆてとつりゆれぬくのそいゆ
字つて死ぬれとつりゆれと左のやまゆゆりゆ

二十九番

左 猪

右 猪

たちのおつてゆれをゆよ定ぬー也

あちさくそへーのつりこてゆくらんこのおふくれのそい
ぬ市乃又らぬのそあちさくそいともおふろしく
ころりゆりぬれゆとあちさくそいゆりゆらん
このとつりいそりぬれまきりくそいゆれぬの
ゆよありゆりこて

左 猪

右 猪

いふせんゆへーとどひゆりゆてきゆくゆよ打志おれゆ
左 まちおーものそ山のそ月とゆりゆと右ゆへーと
たよおとひゆりゆてとつりゆれぬくのそいゆ
字つて死ぬれとつりゆれと左のやまゆゆりゆ

三十番

左 猪

右 猪

あちさくそへーのつりこてゆくらんこのおふくれのそい
ぬ市乃又らぬのそあちさくそいともおふろしく
ころりゆりぬれゆとあちさくそいゆりゆらん
このとつりいそりぬれまきりくそいゆれぬの
ゆよありゆりこて

おもむきありし海さうあけりかきのそこのさうらあさるせ
左様のそよ風うちそくといひ人とさきしとおもひ
とちりんとつやさうふあしけりおき乃ちさて
らその秋風ハ彼あまの神あまの人さきとてつ
まうとさへうあまの神のまことつとさうやうはれ
を猶よあつとさう也

三十一番 罽中意

左

定家新伝

君あゝぬ木のそよまつし一棧衣まゝひもあまはゆこわれり

右様

家隆新伝

茶子やまぬ罽中乃り柳きとひとりのあさる罽のそよ
左歌木のそよまつし一棧衣まゝひもあまはゆこわれり
くわれし右歌まつし一棧衣まゝひもあまはゆこわれり

三十二番

左

有家新伝

すしーあろことねやうとく様。新伝也

むしう罽や独也ひよむせふれさつ、あれう一書もこもして
右様 雅經

そあむじをひささうん市志しんあしぬ罽へ乃あのおうひち
左ハむしう罽やとてはすもあまもてとつとさ
ハあやさそ乃あのおうやとあしけりいひとりあひ
むせふれといひとてはすもあまもてとつとさ
いぬ罽へのあれうひちとつとさゆうよさあまもてとつとさ
右と様のうしーうつとさ

三十三番

右様

親定

君もさういふあやをさしむ旅衣あさつ月とせよはく

右

左大臣

宇津乃山うつかあー紀原さして若山郡の人ちこほほほ
たの袂おつ目とせよよせ入てと約らんをさる原
氏物語の事乃えん能あまそ思わられくいうく
えんよんこし侍り右のまハ宇津の山うつかあー紀
原と侍りけ比う川乃山あまそ思わく侍りまや左侍
侍るへー

二十軍

左侍

拾中細

ささもこゝゑねよへるあろかさあ山と志めてとれを

右

後成口女

乃誓りむとひ一掃さあぬるの事をもり

左禰中乃心きたりふ侍るへー右の志ね一乃誓
むとひ一掃さあぬるの事をもり
と志あくるねを阿まへんさへーあやとて左侍
又志へー侍るへや

二十五番

左侍

あち侍

昔はさふ神をあさる侍りよはうつてもさー宇津の山こ
右

やうりありん程とつ月とせよよせ入てと約らんをさる原
右大臣宇津のまアあしあれくハ侍れと左大臣
乃色あさやうよんし侍り右大臣たうりさあまー
い(うそ)りハあさる事さうまやとて左の侍り

二十六番 山家意

左 孫

俊成四女

人といぬはこふつこころ山さきのねよあろろあさか帯のこま

右

赤尾おた

こぼろお人ちいつもくれまより誰やう里のあまのつむ
たはこあつらさ山さきのこころあろろあまのつむ
お人ちもあまのつむこころあまのつむあまのつむ
いといひおわせぬくもあまのつむあまのつむあまのつむ
ありつらら

二十七番

左 孫

たおた

^{新古}山うつら麻のこ衣あまのつむあまのつむあまのつむあまのつむ

右

定家おた

風あまのつむあまのつむあまのつむあまのつむあまのつむあまのつむ

二十八番

左 孫

親定

たあいて月日や杉あけのたことあまのつむあまのつむあまのつむ

右

あまのつむ

たあいて月日や杉あけのたことあまのつむあまのつむあまのつむ
おもしの信あまのつむあまのつむあまのつむあまのつむあまのつむ
たあいて月日や杉あけのたことあまのつむあまのつむあまのつむ
あまのつむあまのつむあまのつむあまのつむあまのつむあまのつむ
あまのつむあまのつむあまのつむあまのつむあまのつむあまのつむ

二十九番

左 孫

お大信西

山陰や山さきのたあまのつむあまのつむあまのつむあまのつむ

四十三番

左 持

お大傍心

色小見よ神に志られ乃あささのこころの秋はおもひい

右

俊成は女

飛多乃あまをれさとい秋をきぬあやう一人にまつれせ

左はあみささる乃あささのひさしりくはる人

右はあまのこころけりあましくあやし作らん秋を

とくささるくあまをふりて又持を

四十四番

左

檀中細言

はるさよの麻をあれさしあまは彼そいし霧けさ

右 持

文内口

あまのこころあまをりり前記あまのあまのあまのあまの

左はあまの麻を別さしてささるあまのあまの

か佐入河をあや作しむあまのあまのあまのあまの

ともささるあまのあまのあまのあまのあまのあまの

四十五番

左 持

定家翁は

つれあささの持しせりのそのあまのあまのあまのあまの

右

雅徑

人あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

左はあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

乃あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

てあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

四十六番 孫油翁

左拵

後成江女

都ともあろろ乃まきもゆきまゐり戸の沖乃らまひまうた
まゆひ

いづいそてあそあうーあまのふあのみまも月そつわ
右あそわうーかひりまうあうやとあしゆと左戸
屋の沖とまきもあそもゆねい拵とまうー

四十七番

左拵

控申納言

あまめや風乃たうりと持ひて神りいほ立極まうーに
右
定家おた

己にねぬい浪海の月と熱つ、才と半室よとまうあ人
たうら拵とまきも持ひいり右うーまもまきも
ゆねわうやとく又拵と定うーあり

四十八番

左拵

靉堂

おもの人とうらまひ乃まみあ川さむたもふのこら面
右
まおおた

おもひ福の夏後又人とこれと何若れまのうらま也
右右乃漆河さむれいもとのとつうもらうーくい
えゆねた乃若うまも五跡、面靉いりくあ
くゆねを以た右拵

四十九番

左

あち傍西

あひとむし印あまの磯乃まの風たう夏後より又かうあ人
右拵
赤澤おた

うらねあんは流く神のよま月そかさあま水
おもね

左たこ夏夜より又西かへんもあつるわうく侍る哉
右浪よあらしくといひて月そききあそびさう
くやしく侍よあつて侍あり

五十二番

左侍

右侍

まてとくを頼めぬ破乃ち控りあき乃浪の初ぬあそびあり

右

雅経

かこふり袖もさきみの浪抱ひとりありのうらや乃身や
左たの上のうらともふさうくあし侍を右の末のう
らうや乃身やことのからうくあし侍り左虫の乃
浪乃初ぬあそびもことかちよ侍あり

五十一番 同路意

左侍

お大信正

東海やひとり旅子乃目教るそ細きあへぬあし侍る

右

控申 納言

いそいそんくそあそびあそびもいそ名こそ乃名とさへん
左あといれくみ侍り右あいそいそんを侍りさ
控よハ侍れとあそびあそび侍れを左侍よ定ち侍
ーたり

五十二番

左侍

家隆朝臣

こほくさくうあそびもそけ侍らんこ夏のあそび浪の月記

右

雅経

新古
人仕商部とあそび侍らんこ袖又園も教あみのからひち
左右乃侍らんここふさうーと後よハん侍るを左
乃うさ名もそけいそあそび侍るあそびは

すうーうさくくやとハスレ侍れと折又付侍より

五十三番

左侍

後奉り女

あふされ本御付多ふあれぞと衣とおもあふつてらう

右

宮内口

たしまつう人やいほくさあろくろく名さへうりーあふされ貫

あふ乃多取ひく程の侍者ささる兒やう又侍れ也

あふ兒心とあふ兒又あふ侍れハ左の侍より侍

又十四番

左侍

左大侍

あふ多やこのふと雲と流麻川さうろは神のうくに志わぬ

右

あふ家御侍

誰と又雲もれとやい流えんさうせさや神乃あふ月記

左こらひと雲とさうり河ハ取くくも侍れ右乃

あふせさや神乃あふつうハあふ侍れとと白い

五十三番

左侍

家御

意どのことあふ乃雲屋の扱ひさうけく神も流ハこく

右

定家朝臣

すう乃浦や浪は面乳たちさひて雲あさこゆ風をわづき

左右の侍乃雲たハさうく神もあふ侍れ

侍ら右に雲あさこゆあさこゆさうりく侍れとと風

そまの記あさりさやとあし侍れとと左侍あえ

又あし侍れとと侍

右

定家新巻

かれのこをいふ乃海士の神ぬれく又いふくちをいふかかへく
左たひくわりの御方あく侍とて侍は定家一も侍

六十番

左

控中納言

後まつむいせとのあふ乃我神とあふいとるんりそとあふ

右御

家後新巻

もーわされひのさうもさうとさうらうふとさうまへーすうれ浦凡
左軽ひとるんま古今のあ乃御あへーさもつんし
侍らぬやあくとさうまへーさうのうらう風を侍ふ

侍らへー

六十一番 河色巻

左御

左大臣

泊瀬河井てあは流のさうよよとのれらさきて人を強原さ

右

定家新巻

名丸川をれをつー侍らう神のたうら瀬くのむをれあ
左あまら侍川かてあは流のまゝあま集と川く
又えんよんて侍らあまらり河せの理あ事四
侍らへー侍ら侍らむ

六十二番

左御

親定

家たもとさて山河乃瀬よあひくあもくりをあふうくつらあ

右

後成口女

あうれく乃繁りさそあを瀬川ををあれゆく水の白あ
左さく山河乃瀬よあひくとさてまをくつらあ
あて侍ら文字つて記まてふえああかくさうんて侍

あふ〜

六十六番 寄雨忘

左

控中納言

あふれも朝の志つくりぬくよあもひらぬくもさるそなも

右 孫

俊成口女

新古

あふれにけり時ぬは神よ秋もきていひもろとさゆとせしるふ

たふああれととせけりりあの句もてぬのふせも

ていさあし侍ととた乃吾時ぬは神よ秋もきてなと

いへ文字つとさえん又侍ふりあのちよる侍り

六十七番

左

みよ家納言

あれりともぬもあらともあふれふえあぬ床よあたまりつ

右 孫

定家納言

控くまゐり宿いととてあみこたさのころり乃むふいせれ

たえあぬ床いぬ床もや侍むむ右佐登乃ころりの

む〜さあぬ親〜い〜ら〜も侍〜一侍の字付

侍りふり

六十八番

左 孫

親定

あふれもそのあこの字とあけさとも侍納乃山のあれれ侍り

右

雅行

あふれもひもぬあらもやぬとあけさとも侍り乃ほふ衣れ神

たさあらあら乃字とあけさともなとつとあら謀と

わ〜く〜ら〜ん〜し侍れ右侍たぬあもやぬとあ

あ〜つ〜えん〜い〜み〜し侍れとあ奴たぬぬ乃ゆあれ

あ〜れ〜わ〜く〜こ〜ら〜り〜て〜ん〜し侍り侍乃字と〜く〜侍り

五つを、面月より終へ

七十五番

左

定家朝臣

^{新古} 志ろくへ乃社のふれ、雲霧落て方う、むきの新風そく

右掛

雅經

いまうてあねあまこの小夜交てまうとあやふ松風の香
右寄方うむきの新う勢そくとしく、まう
さうまにあうさうへ、右寄まうとおやうま風の
あうとしくまうさうあうく、うさうまうて右のう
と定家朝臣あり

親定

左大臣右近

侍 十四

頁

又

若大伴正盛

侍 九 持三

頁 三

控中細言上経

侍 三 持三

頁 九

俊成口女

侍 五 持四

頁 六

文内口

侍 四 持二

頁 九

大藏口五家

侍 四 持二

頁 六

左色末控少羽定家

侍 四 持五

頁 七

上信女末原家隆

侍 五 持三

頁 六

左色末控少将雅經

侍 四 持五

頁 七



